

非言語行動である「うなずき」の機能と その役割への一考察

近 藤 富 英

1. はじめに

人間がコミュニケーション行動を行うときに使っているのは、言葉だけではない。言葉に伴うイントネーションなどのほか、咳払いなど言葉とは別な音、さらには身体の動きや顔の表情などが言葉と相互に関連を持ちながら、実際のコミュニケーションは成り立っている。本稿ではその言葉以外でコミュニケーションの際によく使われる非言語行動のひとつである「うなずき」を取り上げ、その機能や役割を明らかにしようとするものである。

「うなずき」という非言語動作は英語では nodding（反対は shaking）と言われるが、もちろん会話中などに頭を縦に振る動作のことである。この「うなずき」がもっともよく使われるのは「あいづち」としてではなかろうか。一般に非言語行動は言語行動ほど意識されて使用されることが少ないが、この「うなずき」は「あいづち」として聞き手によって使われることが一般的なように思われるが、「うなずき」と「あいづち」はどう異なるのであろうか？ また話し手による「うなずき」などというものがあるのであろうか。

Ekman & Friesen (1969) は、非言語行動をエンブレム（表象）、イラストレーター（図解）、レギュレーター（調節）、アフェクト・ディスプレー（感情表出）、アダプター（適応）の五つに分類したが、その分類を基に「うなずき」が持つさまざまな機能と役割を考察する。

2. 「うなずき」とは

最初に日本語の「うなずき」について定義しておく。本稿でいう「うなずき」とは以下の動作を表すこととする。

うなずき：二人以上の会話において、その会話参加者による首を縦に振る非言語行動。言葉と同時に行われることもあれば、言葉を伴わず単独でも使われ、また言葉以外の音声と同時にされることもある。一回の動作のことであれば、二度、三度（あるいはそれ以上）と連續して繰り返されることもある。なお、微笑みや視線、身ぶりなど、他の非言語行動を伴うときもある。

すなわち、本稿でいう「うなずき」とは、「会話中の首の縦方向の動き」であるが、上記の定義のように、他の補強的な言葉やしぐさと共に起するような場合も含め、さまざまな状況の中での動きをすべて含めている。

一般に「うなずき」は「あいづち」と似たものとして捉えられることがあるが、「あいづ

ち」は、一般的にはコミュニケーションの際の聞き手側のフィードバックと考えられる。会話において、普通は相手が話している間、じっと聞いているということではなく、聞き手は何らかの反応を示すものである。聞き手が何もせずにじっと聞いていれば、話し手に不安を与えることになるので、聞き手は話を聞いているという何らかの反応を示すことになる。その反応がフィードバックであり、「うなずき」は非言語行動としてのフィードバックのひとつと考えられる。フィードバックの機能として、「うなずき」以外の非言語行動としては、視線を合わせたり、笑いかけるなどの動作が、同じような「あいづち」の機能を持っている。非言語行動以外の「あいづち」としては、言葉と言葉以外の音がある。言葉としては、「はい」、「ええ」、「あっ、そうですか」、「へえー」などであり、言葉以外の音としては、軽く「ふんふん」などの音が考えられる。すなわち、話し手に対して聞き手が聞いているということを示すすべての言葉や動作がこれにあたる。

つまり、「うなずき」は「あいづち」のひとつと言えるのだが、「うなずき」にはその「あいづち」の持つフィードバック以外の機能はないのだろうか。

3. データの収集とデータベース作成の方法

3. 1. データについて

データとして用いたのは、2004年9月29日に放送されたテレビのインタビュー番組『徹子の部屋』である。黒柳徹子が司会をし、毎回ゲストとして一人を招き、正味30分間、対談する番組である。この日のゲストはシンガー・ソングライターのタケカワユキヒデで、話題はゲストの長女の手作り結婚式を中心であった。

この番組をビデオ録画した後、初めからタイマーを付けてダビングし、その後、音声のみをオーディオ・テープにコピーして、そのオーディオ・テープを基にデータシートに文字を書き起こした。タイマー入りのビデオを基に、書き起こした文字に沿い時間を追って「うなずき」の箇所を記録するという方法をとった。今回は言葉と非言語動作のひとつである「うなずき」の関係を調べるのが目的であるため、「うなずき」以外の非言語動作やパラランゲージは捨象した。

3. 2. データ・ベース作成の方法

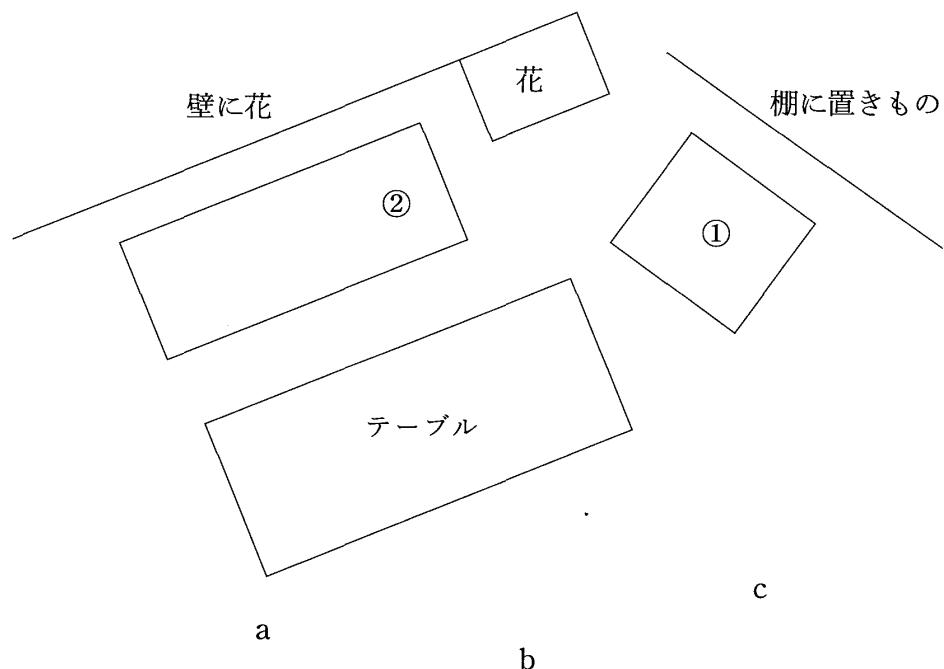
データシートについて簡単に説明すると、B4の用紙を横向きにし、上下二段に分けて、それぞれ黒柳とタケカワの記入部分がある。それぞれの欄はさらに言語記号(L)と非言語記号(N)である「うなずき」を記す欄に分けられている。一番上にはビデオテープに付いたタイマーの示す実際の時間(real time)を付加して、それぞれの言語記号と「うなずき」がいつ生じたのかがすぐにわかるようになっている。

データベース作成への記入方法としては、言語記号の記録には漢字、ひらがな、カタカナ混じりの正書法を用いた。「うなずき」の部分はNdという記号を使い、回数が繰り返された場合は、Ndをその数だけ記入した。なお、言語記号のどの部分で「うなずき」が生じたかがわかるように、〔 〕でその共通部分を示すことにした。なお、〔 〕の前後には小さなアルファベットを付すことによって、より共起した場所がはっきりわかるようにし

た。このようなデータシートを使用することによって、交互ではなくて二人が重なってインターラクションを行っても同時に示すことができる。

3. 3. 司会者とゲストとセット

上述したように、司会者は黒柳徹子で70才前後の女性である。ゲストのタケカワ ユキヒデはシンガー・ソングライターで以前はゴダイゴというグループを結成していたが、50代の男性である。二人は初対面ではなく、以前音楽のテレビ番組などを通して旧知の間柄のようである。対談の行われた場所は、テレビ局のスタジオに設けられた部屋で、テーブルを前に右側に肘掛け椅子、左側に揃いのソファーが120度ほどの角度で並べられ、向かって右の椅子に黒柳、左のソファーにタケカワが座っている。花瓶が中央の奥に置かれ、壁にも花が飾られている。黒柳の後方の棚には置物がいくつか並べられている。テーブルの上にはそれぞれコーヒーが置かれている。部屋を図で示すと以下のようになる。①に黒柳が②にタケカワが座っている。



話題はもっぱらタケカワの長女の手作り結婚式のことなどで、対談の雰囲気は明るくなごやかでくつろいだものであった。

カメラはa, b, cの3台あるらしく、aとcで黒柳とタケカワをそれぞれ正面から捉え、bで全体像を写しているようだ。それぞれのカメラが徐々にクローズアップしたり、やや離れて撮ったりしていた。

4. Ekman と Friesen の非言語行動の分類法

本稿ではEkman & Friesen (1969) の非言語行動の分類法によって、「うなずき」の種類の考察を進めたが、Ekman等の分類法は以下のようなものである。

- (1) エンブレム (Emblem=表象)：文化的に定められた身ぶりで、それに相当する言葉に置き換えられるもので、単独で使っても意味が通じるもの。言葉の選択と同様にかなり意識的に使われる。「はい」といいながら頭を上下に振るなどがこれに当たる。
- (2) イラストレーター (Illustrator=例示)：言語に付随し、特定な語や節などを強調したり、話の流れや方向を示したり、物事のリズムや空間的関係などを説明する。言及されているものを指したり、強い口調の時に手を動かすなどがこれに当たる。
- (3) アフェクト・ディスプレイ (Affect display=感情表出)：感情の状態を示す顔の表情のこと、その表す程度や感情を混ぜて表現するときの混ざり方などには文化的ルールがあるとされる。普遍的と考えられている表情は、幸福感、驚き、恐れ、悲しみ、怒り、嫌悪、興味の八つだと言われる。
- (4) レギュレーター (Regulator=調節)：複数の参加者での会話において、話を続けたりするための調節作用をする動作。「あいづち」や視線の動きなどがこれに当たる。
- (5) アダプター (Adaptor=適応)：状況や社会的場面に適応するために子どもの頃から発達する動作。乾きなど身体的欲求を満たすために舌で唇をなめたり、車の運転など道具を使いこなす動作がこれに含まれる。
- 「うなずき」は、肯定の意を表すエンブレムがその機能だと思われるが、上記分類の他の機能について、「うなずき」が関連しているかをまず考察する。

5. 結 果

「うなずき」に多くの例が見られたが、ここでは聞き手と話してによって行われているものに分類して代表的なものを示す。

5. 1. 聞き手による「うなずき」

5. 1. 1. 肯定を示す「うなずき」

聞き手の「うなずき」としてまず挙げられるのは、エンブレムとしての「うなずき」である。「肯定」という言葉に相当する語句に翻訳できるので、エンブレムというわけである。これは「うなずき」の代表的な例で、いわゆる「あいづち」の役割をしている。

例1：

T	分 秒	0 30	31	32
黒	N			
柳	L	2人目のお嬢様で a[たね]a		あのう
タケ カワ	N		a[Nd]a b[Nd]b	
	L		a[そうです]a b[はい]b	

タケカワは黒柳の文の終りの「…たね」に重ねて「うなずき」が行っている。この肯定を示す「うなずき」は、たいていの場合、「はい」、「そうです」、「ええ」などといった言葉の相づちとともに使われるが、例1の場合も「そうです」という言葉と一緒に使われている。もちろん、言葉は発せず、「うなずく」だけでもいいのだが、言葉と共に用いることによって、より肯定の程度が増していると考えられる。

5. 1. 2. 発話を促す「うなずき」

話のやりとりを続けたり、話がスムーズに進むために行われる調整行動をレギュレーターと呼んだが、「うなずき」でこの機能を果たしているのが、次の例2である。

例2：

T	分 秒	16	5	6	7
黒	N				
柳	L		a[Nd]a		b[Nd]b
タケ カ ワ	N				
	L	うちの奥さんも		その新郎のね	

タケカワが「うちの奥さんも、その新郎のね」と発話をしているが、黒柳は二度とも発話の区切りのところで「うなずき」を行っている。これは、タケカワの話に肯定を示しているのではなく、相手の話の継続を促す役目をしている。話がスムーズに進む役割をしているので、レギュレーターとしての機能を果たしている。

5. 1. 3. 肯定しながらターンを取る「うなずき」

次の例3はエンブレムの機能とレギュレータの機能が重なっている例である。すなわち、話しての内容に同意しながら、そのままターン（話す順番）を取ってしまった例である。

例3：

T	分 秒	0	54	55	56
黒	N				
柳	L	あなた孫が		3人	
タ ケ カ ワ	N		a[Nd]a		
	L		a[ええ]a	孫、そうですね、僕が	

黒柳がタケカワに向かって「あなた孫が」と言いかけると、タケカワは「うなずき」をしながら、「孫、 そうですね。僕が…」と話しかめている。ターンのやりとりも会話のスムーズな進行に関係しているので、ここでの「うなずき」もレギュレーターと考えられる。肯定のエンブレムと機能が重なっていると言えるが、非言語行動には同時にいくつかの機能を併せ持つことは可能である。

5. 2. 話し手による「うなずき」

「うなずき」は聞き手によるものが多いと考えていたが、実際のデータを分析すると話し手による「うなずき」も同時に使われていることがわかった。

5. 2. 1. ターンを譲る「うなずき」

例4は話し手が話の途中で「うなづく」ことで、相手にターンを譲っている例である。

例4：

T	分 秒	3 13	15
黒	N		a〔 Nd 〕a
柳	L	その24才が、 学生結	a〔 婚 〕a
タ ケ カ ワ	N		
	L		そうですね、 形としては

黒柳は「その24才が、 学生結婚」と言っているが、最後の「(結) 婚」というところで、「うなずいて」いる。日本語は必ずしも、発話が文として完成しなくとも、相手が途中から話を続けることがよく行われる（日本語の会話は「共話」と称されることもある）が、タケカワは「そうですね。形としては…」と譲られたターンを受け取って話を始めた。話し手側が会話の進行をリードしている例と言えるが、会話がスムーズに進む役割として「うなずき」が使われているので、レギュレーターの機能を果たしていると考えられる。

5. 2. 2. アクセントとしての「うなずき」

アクセントとは話に強弱のリズムをつけることであるが、それによって、より印象に残る話ができる。いわゆる話が「のってくる」場合に、このアクセントが多く生じることがある。

例 5 :

T	分 秒	5 46	47
黒	N		
柳	L		
タケ カワ	N	a[Nd]a	b[Nd]b
	L	本当 a[に]a 見つけてき b[まし]b たよ	

例 6において、タケカワは「本当にみつけてきましたよ」と言っているが、この時「(本当) に」と「まし (たよ)」という箇所で二回、「うなずき」を見せている。言語に付随した非言語動作であるので、イラストレーターと分類できる。

5. 2. 3. パンクチュエイトとしての「うなずき」

話し手は、文節の終り目や、場合によっては途中で発話と共に「うなずき」を使い、話に短い区切りを入れることができる。これにより、話をわかりやすくすることができるが、例 6 はそのような例である。

例 6 :

T	分 秒	2 17	18
黒	N	a[Nd]a	
柳	L	タケノコって a[言ったんですって]a それがとっても	
タケ カワ	N		
	L		

例 6において、黒柳は「タケノコって言ったんですって。それがとっても…」と発言しているが、「言ったんですって」の部分で「うなずいて」いるが、文節の終りにおけるパンクチュエイトの例である。パンクチュエイトも発話の流れと結びついて使用されるので、イラストレーターのひとつである。

5. 3. 話し手から聞き手に伝わる「うなずき」

以上、見てきたように、「うなずき」は聞き手と話し手によって、さまざまな機能を果しながら、どちらかによって使用されるのであるが、時には話し手から聞き手へ「うなずき」が時間をおかずに続けて生じることもある。下の例 7 はそのような例である。

例7：

T	分 秒	9 35	36	37
黒	N		a[Nd]a	
柳	L	お頼みに a[なった]a		これ素敵だったと
タケ カワ	N		b[Nd]b	
	L		b[そうです]b	

黒柳が「お頼みになった」と言いながら、「なった」で「うなずいて」いる。パンクチューションとして使われているイラストレーターであるが、寸分をおかずに、タケカワは「そうです」と言いながら、「うなずき」返している。こちらは肯定のエンブレムであるが、このように実際の会話においては、さまざまな機能が続けて用いらることは往々にしてあるのである。話がいわゆる佳境に入ってきたりすると、「うなずき」に限らず一般的に動作が多くなるのであるが、このように「うなずき」が使われることにより、二人の間の心理的な距離を縮めているとも解釈できる。

6. 考察とまとめ

今回の調査からわかるように、「うなずき」は単にフィードバックとしての「あいづち」として用いられるものばかりではなく、「あいづち」のひとつの種類であった。また聞き手によって使用されるばかりではなく、等しく話し手によっても使用されていた。ただし、聞き手によって使用される機能としては、エンブレムとレギュレーターであり、話し手によって使用されるのは、イラストレーターとレギュレーターであった。共通するレギュレーターはどちらもターン・ティキング（話す順番のやりとり）に関係するものであった。

考えてみれば、会話においては話す順番がとても大切だと考えられる。たまに、同時に話し始めて、間の悪い思いをすることがある。視線や腕の動きなど、他の要素もターンの交代には重要な働きをしているが、「うなずき」は話し手と聞き手の両者によって、ターンを調節しているわけである。ターンは譲る方も受ける方も関係しているからであろう。

肯定としての「うなずき」は相手に賛同するわけなので、聞き手が使うというのは説明ができる。ただし、今回の例にはなかったが、話し手が「そうなんです」などと言う場合、自分の言ったことを肯定、すなわち「うなずき」ながら話すことは可能であろう。その場合は話し手も肯定のエンブレムは使えることになるがやや特殊な例と考えられる。

話し手のアクセントとパンクチュエイトは実際に行われている発話に対して行うので、当然、話し手による「うなずき」の機能ということになる。

このように「うなずき」とは、聞き手が話し手に対してフィードバックを与えて安心させたり、会話を生き生きと行う道具になったり、また会話をスムーズに運ぶための機能も持つ

ていた。

ところで、「うなづき」が単独で生じることは少なく、視線や腕の動き、顔の表情、さらには笑いなどと共に起ることが普通である。そのような仕組みを明らかにしていくことが今後の課題のひとつだと考えられる。なお、「うなづき」は身ぶりとしては人間にとてはかなり普遍的な機能と考えられるが、どのような頻度や首の振り方をするかなどは文化差があると思われる。そのような「うなづき」の文化的な側面の解明も待たれるところである。

参考文献

Ekman, P. and Friesen, W.V.

1969 "The Repertoire of Nonverbal Behavior: Categories, Origins, Usage and Coding,"
Semiotica 1 (1).

Ekman, Paul

1979 "Four Types of Facial Expression and Body Movement," *Hidden Dimensions of Communication*, 文化評論出版.

Kendon, Adam (ed.)

1981 *Nonverbal Communication, Interaction and Gesture*, The Hague: Mouton Publishers.

水谷信子

1983 「あいづち論」, 『日本語学』, Vol.7, No.13, 明治書院.